

教育最前線

連載 23

● 鈴鹿市立深伊沢保育所・自転車教室

小学校入学直前の幼児に 自転車の安全な乗り方を身につけてもらう

「自転車教室」の内容

1 座学

自転車を安全に利用するためには、いろいろな約束があることを幼児に伝える。イラストを使って、自分の体格に合った自転車に乗らないと、正しい運転操作ができなかったり、転倒しやすくなることを説明。ヘルメットの正しい着用方法や取り扱い方法についても指導を行った。



座学の最後には、「自転車は左側端を一直線で走る」「止まる時は両手でブレーキをかける」「交差点や曲がり角では絶対に止まる」と指導員が読み上げ、子どもたち全員が復唱した。



指導員が読み上げ、子どもたち全員が復唱した。



2 実技

「止まって観る」ことを身につけてもらうために、保育所の庭の中に、一時停止標識のある交差点を設け、子どもたちにそこを通過してもらう。



標識の手前で止まって、自転車を降りて左右をよく観る。さらに、顔を動かして右後方にクルマなどがいないか確認してから、自転車を押して交差点を渡るように指導。



バランス感覚を養うために、パイロンの間を通り抜ける課題にも子どもたちは取り組んだ。



保育所の庭につくられたコースで、幼児14名が実技指導を受けた

3月8日、鈴鹿市立深伊沢保育所(三重県鈴鹿市)で自転車教室が開催された。小学校入学後は、放課後や休日に子どもが一人で自転車を利用するケースが増える。そこで鈴鹿市では、そうした際の事故防止を目的に要請のあった市内の保育所や幼稚園で、小学校に入学する直前の時期に自転車の安全な乗り方を指導している。同保育所の竹石寿美子所長は、「5歳くらいになると、ほとんどの子どもが自転車に乗り始めます。小学生になれば、一人

自転車に乗る時はヘルメットをかぶる

ポイント①(走行前)

で自転車に乗って遊びに行くことができるようになりますから、早い時期から自転車教育を行うことはたいへん重要ですよ」と語る。

この日は、鈴鹿市交通教育指導員の近藤麻里さんと浅野尚子さんが同保育所の幼児14名を指導した。

最初は教室での座学から始まる。腹話術の人形を使いながら、近藤さんと浅野さんが子どもたちに講話を行った。

まず、自転車に乗る前には、頭部を保護するためのヘルメットを必ず着用すること。

「ヘルメットは、自転車が転倒してしまった時に、皆さんの頭を守ってくれる大切なものです。だから、自分の自転車に乗る時はもちろん、お父さんやお母さんの自転車に乗せてもらう時もかぶってください」と、ヘルメットを子どもたちに見せる。さらに、腹話術の人形にかぶせながら、自分



浅野さんが腹話術の人形を使って、ヘルメットのあごひもの締め方を説明

のあごとの間に、指が1本人入るくらいのゆとりを持つように、あごひもの締め方を説明した。

ポイント②(走行時)

「止まって観る(観察する)」の再確認

次に走行位置について。歩く時は、道路の右側端だが、自転車の時は道路の左側端となることを説明する。また、他の人と一緒に走行する時は、横に並ぶのではなく、縦に1列になるように注意を促した。

そして、近藤さんは「歩いていて、小さい道から大きな道に出る時に大切なことは何でしたか?」と子どもた

ちに問いかけた。子どもたちは「止まる!」と答える。

「そうです。これは自転車に乗っている時も同じ。絶対に飛び出さないようにしましょう」と、必ず止まってから、自転車を降りて左右を観る(観察する)ことの大切さを近藤さんは強調した。

ポイント③(停止時)

ブレーキを使って正しく止まる

続いて近藤さんが、自転車に乗っている男の子が足を地面につけて止まろうとしているイラストを子どもたちに見せる。このようにすると、「止まれない」「足をケガしてしまう」など、ブレーキを使わずに自分の足で止



近藤さんが自分の足を使って止まることの危険性を説明

まろうとすることが危険である理由を解説していく。

「止まる時はブレーキ、ギュー」と覚えておいてください」と、両手でブレーキレバーをかけて止まるように近藤さんは子どもたちに伝えた。

学んだことを自転車に乗って確認

座学が終わると、子どもたちは庭に出て、自分の自転車に乗り、座学で学んだ基本的な安全運転のポイントを体験しながら確認した。

竹石所長は、「このような参加体験型の自転車教室は、身体を使って、身体で感じて、正しい知識を身につけられるので、子どもには効果的だと思います。保護者の方々からも、家庭で自転車の交通安全について話し合うきっかけになると好評です」という。

指導を担当した近藤さんは、「実際に、小学生でもブレーキを使わずに足で止まろうとする子どもは少なくありません。事故防止において、止まることは最も重要ですから、今のうちから正しい運転操作を身につけてもらいたい。そうすれば、この子どもたちが小学生になってから、自転車教育を受けた時の理解力も向上するはずですよ」と幼児への自転車教育の意義を語る。